基肄城築造1350年

基肄城を知る⑬

―基肄城を国の宝へと押し上げた人―

基肄城跡は、昭和12年に我が国にとって歴史上または学術上価値が高いことが認められ、国の史跡に指定されました。そして、昭和29年に国指定の史跡の中でも、特に重要なものとして「特別史跡」に指定されました。文化庁のホームページでは、国が指定した史跡は全国で1，724件あり、このうち61件が特別史跡として指定されています。つまり、基肄城跡は、国指定史跡のうち僅か3パーセントにあたる特別史跡の一つとして、まさに我が国の宝と言うことができるのではないでしょうか。

基肄城は、古代において国が編纂した『日本書紀』・『続日本紀』に築造・修理といった内容の記事中に登場し、中世で再び山城として再利用された後、近世時に『筑前國續風土記』・『太宰管内志』などに紹介されましたが、内容や学術的価値については、未だ言及されませんでした。その後、明治末期頃の「神籠石論争」の中で基肄城が取り上げられたことがありましたが、大正元年の内務省技師で朝鮮古蹟調査の実績を持つ関野貞氏の現地踏査により、基肄城が立派な朝鮮式山城であり、665年に大野城とともに築かれた『日本書紀』に記述の椽城（基肄城）であることに疑う余地はないと断定されました。これを機に、その後の本格的な研究と価値を広めるための活動が始まりました。

当時、この中心的な役割を果たしたのが、基山町（当時は基山村）在住で専念寺住職をされていた久保山善映氏でした。昭和12年に発行された『肥前史談』では、久保山氏の功労について「基肄城址の研究調査に一身を捧げ此間實に前後通じて二十餘年其の研究調査の為に付登山すること五六百回の多きに及び而かも一切人手を借らず自費を抛ちて苦心惨憺資料を蒐集し遂に我國の歴史上重要なる遺蹟なる事を天下に闡明し續いて肥前史談會を動かし天智天皇の御偉業を顕彰すべく記念碑を基山頂上に建設するに至ったのである。」との記述があります。このように久保山氏は、基肄城に対する研究や周知化のために、長年にわたって骨身を惜しまず精力的に活動し、その成果を多くの論文や講演として発表することで、基肄城の価値を広く世に知らしめることに尽力されました。積み重ねられた実績により多くの人々に影響を与え、久保山氏も発起人の一人として名前を連ねた肥前史談會主催の寄附活動により、昭和8年に現在も基山山頂に聳える「天智天皇欽仰之碑」の建立に至りました。また、国の史跡指定についても、当時の県知事の紹介により上京のうえ直接文部省に出向き、指定への促進を陳情されています。

久保山氏は先述した大正元年の関野氏の現地踏査に随行されており、その時のことを昭和13年の『肥前史談 基肄城址史蹟指定記念號』で次のように記されています。「關野博士登山の結果従來學者間に神籠石、並に其の水門として議論されてゐた住吉神社境内の遺跡が、基肄城址に相違ないと發表されるに及び、若駒の春草に出遭つたやうにピッタリ引きつけられたのだった。」この一文は、間違いなく大野城とともに築かれた基肄城であるとの確信を得た久保山氏の基肄城への愛着と、その後の活動への決意が込められたものではないかと思われます。

基肄城は、国の宝として今年で築造1350年を迎えています。久保山氏の多大な功績があったとはいえ、長い年月の間、良好な状況で保たれてきたのは、記録に残らない郷土の先人たちの労苦の賜物であること、そして久保山氏の活躍以後についても、現在もなお基肄城の保存活用に心を砕かれている多くの個人や団体の方々がおられることを、文末ではありますが申し添えます。

※問合せ先
教育学習課
ふるさと歴史係
電話92―2200